

ショートストーリー

## 「おそとで暮らそ」 山村 光春 絵・つき山いくよ

そうして私たちが2年と8ヶ月見続けてきた夢が、  
あまつさえ最初に思い描いていた多くがかなえられ  
いまここに、こうして存在していること。  
うれしくて、でもわけわかんなくて、  
にわかには信じられなかった。

「超100パーありえない……」と私がつぶやくと、隣にいる彼は  
「おくも…ありえへん」と鼻をずるずるさせさせう。  
泣いているのか、アレルギーか、きっとそのどっちもだろう、  
いずれにしろ、もともとない目はさらになくなり、  
鼻はよっぱらいのオッサンのように真っ赤になっていて  
ふつうに考えると、とても見られた物体じゃなかったけれど、  
私には、そんな彼の顔がむしろかっこよく映り、  
目の前の光景と交互でガン見しては、悦に入っていた。

そう、ついに、ふたりの手作りによる理想の「家」が完成したのだ。

私たちふたりがいっしょになろうと決めたとき、  
(彼のプロポーズも相当ありえなかった。その話はまた今度)  
住むところはどうか、という話になった。  
なにしろ、私たちが出会ったのは公園の木の下で、  
それから、川べりで会うようになったり、  
また違う公園になったり、  
ある時期なんて、駅のホームと歩道橋ごしに、  
おたがいの姿を確認するだけの日々もあったり。  
なにせよ、そのほとんどがおそとで、  
ふたりにとっては、それが自然なことだったので、  
今さら、ひとつ屋根の下で暮らすというのが  
照れくさいというか、違和感があるというか、窮屈というか、  
まったくもってイメージができなかった。  
それは、彼もやっぱり同じだったようで、  
しかも「今さら」という、のっけの言葉さえいっしょだった。  
「今さら、なんかうちの中にふたりでおるって、  
ままごとみたいで、現実味があれへん感じがすんねんー」

そこで、じゃあどういふ家なら住みたいかを、  
いつもの駅と駅のまんなかにある公園の、  
ある角度からは木がまっすぐ並んでいるように見える  
小道脇のベンチに座って、マツリ、ガツリ語り合った。  
朝早くに会ったのに、はっと気付いたらもうお昼すぎで、  
ふたりともお腹がすいていることに突然気付き、  
近くの売店でデニッシュ菓子パンと牛乳を買って、  
ぼそぼそとバクつきつつ、第2ラウンドの開始。  
第1ラウンドに比べ、話はさらに具体性を帯び、  
限らないディテールにまで、みるみる進んでいった。  
あげく彼は、私に貯金額をおもむろに聞いたかと思うと  
空中で、そろばんの玉をはじいているようなしぐさをした。  
そうして、ベースのプロットができあがったのは  
月がぼかんと、まるくきれいに見える時間で、  
ほとほとしゃべり疲れた私たちは、  
しばらく月空を見上げて、ぼかんとほうけていた。

まず私たちがしたことは、土地を探すことだった。  
都心からは外れた、でも田舎過ぎないところで、  
たくさんの自然に囲まれていて、  
何も建物が建っていないなら地がよかった。  
不動産屋をめぐるめぐって、ようやくみつけたそこは  
雑草が腰のあたりまでぼうぼうに生えたましかくの土地で、  
何かの拍子でうっかり生えてしまったのだろう、  
か細い木が土地のほぼまんなか1本、  
ひょいっと顔を出していた。  
まさに理想的。私たちは合図のようにチャッと顔を見合わせた。  
そして「あ、この木は抜いちゃいますからね」  
と不動産屋さんがいうのを、いいんですいいんですと  
ふたりして手をバタバタさせた。

契約書にハンコを押したその足で、  
私たちはクワとシャベルを持って、  
ジャージ姿で電車に乗って、我らが土地へと繰り出した。  
そして、年じゅう日当りのよさそうな場所を選び、土地を耕した。  
耕せば耕すほど、土は肥えるという、本に書いてあったことを  
まんま鵜呑みにして、せっせこせっせこ耕しまくった。  
すると、近所のおじさんが物見遊山でふらりと現れ  
「がんばとんなー」と声をかけてきたかと思うと  
クワはな、こういうふうにするすとええんや、と  
耕し方のワンポイントアドバイスをし、  
ほな、頑張れよと、ふらり去っていった。  
そんなこんなでようやくできたブチ農園に、  
私たちは、それぞれ自分たちの好きな野菜の種をまいた。

次は、キッチンを作る番だ。  
土地の真ん中に、建物も建てずむきだしのキッチンを作る。  
これが、私たちの計画のうちの大きなひとつだった。  
これぞオープンセントラルキッチン!と  
能天気にはしゃいでいた自分たちをうらみたくなるほど、  
その作業は、なかなかもって大変だった。  
庭に地縄を張り、位置と大きさを決め、  
一部分だけを残してウッドデッキを敷く。  
空いているところにコンクリートブロックを敷き、  
その上にレンガを積む。  
タープを張り、その下にテーブルと椅子を置く。  
そうして、毎日がキャンプ気分満点の  
ダイニングキッチンができあがった。

眠ったり、雨風をしのいだり、洋服などをしまうのは  
もともと自分たちが持っていたテントを使おうと  
決めていたので、当初ではこれで完成!のはずだったが  
土壇場で彼が、実はな……と告白した。  
「駐車場の管理してるオッサンがいつも待機してる  
小屋みたいなのあるやん。あれがどうしても欲しいねん。  
僕、本を読むのだけは、まんが喫茶の個室みたいな  
ところでないと、なんか落ち着かんねよなあ」  
いろいろ調べてみた結果、物置などに使う  
木製の一坪パネルハウスキットがおあつらえ向きと知り、  
さっそく手に入れた私たちは、なんとかこれも  
自分たちの手だけで組み立てることができた。

「できたな」「うん、できたね」

こうして私たちふたりの新しい、おそと暮らしが始まった。

やまむらみつはる  
ペーパーメディアを中心に編集・執筆を手がける  
BOOKLUCK主宰。自身のリトルプレスレーベルにて、  
雑貨のようなフォトブックを2タイトルリリース。  
3月末から4月にかけて、全国各地でフェアを開催。  
<http://www.bookluck.jp/>

つきやまいくよ  
絵やパフォーマンス、本の制作など、ジワジワあつく活動中。  
東京での初個展を終えて脱力(たぶん)している。  
過去の展覧会のDMやイベントのフライヤーを素材に、  
一部ずつ手で作った部数限定の本「REPAPER」を作りました。  
<http://ameblo.jp/tsukilemon/>